

# 中世ドイツ語における迂言表現

— 押韻技法の観点から — その1

武 市 修

## 1. はじめに

人間は一般に他者との関わりの中で生存するものであり、日常生活においてさまざまな形で自己を表現する必要に迫られるし、また、それを欲しもする。それらの表現のすぐれて美的なものが芸術であろう。芸術には音あるいは音声による表現、色彩による表現、造形による表現等さまざまな形があるが、言葉による表現が文学である。文学作品では内容とともに形式が重視されるのは当然であり、作者はさまざまな表現技法を駆使しつつ推敲を重ねて作品を仕上げる。このことは散文作品においても重要であるが、一定の制約の中で表現しなければならない詩作品においてはとりわけ形式上の工夫が必要になる。迂言法 (Periphrase あるいは Umschreibung) もこのような技法のひとつである。

中高ドイツ語 (Mhd.) の文学は脚韻の芸術である。リズムを整え押韻するために詩人はいろいろな可能性を試みる。Mhd. の文学作品には、単一の語で表わしてもよさそうに思われるところで、しばしば複数の語による表現がみられる。本稿では、このような迂言表現の中で、単独の動詞の代わりに複数の語を用いた動詞表現のひとつである現在分詞を用いた迂言形を押韻技法の観点から、ドイツ文学最初の脚韻作品である古高ドイツ語 (Ahd.) のオトフリト (Otfrid von Weissenburg) による『総合福音書』 *Evangelienbuch* にまで遡って探ってみたい。

## 2. *sin* (wesen) と現在分詞

分詞は不定詞と同様に「主語の人称および数によってその形式が規定されることのない動詞の不定形」<sup>1</sup>であり、現在分詞は「ある行為や現象が継続していることを表わす」<sup>2</sup>。現代ドイツ語では現在分詞の役割はもっ

ばら名詞の意味を規定する付加語的用法と副詞的用法に限られ、動詞 sein とともに用いられるのは bedeutend や überzeugend など完全に形容詞化したもののみで、ごく例外的である。ところが、古くはこの結びつきは非常に多く、Mhd.の文法書には「行為が継続しているものと考えられるとき、動詞単独の現在あるいは過去の代わりに、sîn の現在あるいは過去と現在分詞による迂言表現が用いられることがある」<sup>3</sup>として、次の用例を含めていくつかの例を挙げている。

(1) Ez was ein michel wunder, daz si ie genas.

mit klage ir helfende manic vrouwe was. (NL 1067, 1f.)

(下線は筆者、以下同様)

彼女が心痛に耐えて生き延びたのが不思議なほどであった。

嘆き悲しむ彼女を多くの婦人たちが援けた。

このパウルの文法書の統語論の部分を全面的に書き改めたシュレープラー(I. Schröbler)は、この項目を、アクツィオンスアールトを表わす迂言的表現のひとつとして説明し、この結びつきによって「動詞の表わす事象の継続的な性格をとくに強調しようとすることがあるが、それとともに時間的關係が減じ、動詞の表わす叙述の強調でもあり得る」<sup>4</sup>と述べ、さらに注釈で、時にまた、この結びつきが、動詞が継続的でなく瞬間的な出来事を表わすときにも用いられるとして次の例を挙げている。

(2) daz er und sîn pherdelîn

muosten vallende ûf die bluomen sîn. (Pz. 154, 29f.)

それで彼 [=パルツィヴァール] も馬も

花の上にひっくり返らざるを得なかった

(3) ob der doner zaller vrist

slüege, swennez bleczend ist, (W. Gast 13243f.)

もしも稲光がするときに

いつも雷が落ちるのであれば

シュレーブラーは当該個所にそれぞれ „auf die Blumen stürzen müssen“, „wenn es blitzt“ と新高ドイツ語(Nhd.)の部分訳を添えているが、このように *sin(wesen)* + 現在分詞は必ずしも常に動作や事象の継続を表わすとは限らないようである。また、ドイツ語のすべての動詞および動詞表現をアクツィオンスアールトの観点から完全に分類することには無理があり、文法書の説明もすっきりしないし、研究者によって解釈が異なる場合もある。例えば(2)の例の *vallende sin* について、パールチュ(K. Bartsch) は *vallen* と同意だと解しているが、マルティン(E. Martin) は「この書き替えによって事象のより長い継続が示唆されている」と言う<sup>5</sup>。いずれにしても上に挙げた例はどれも *sin* の何らかの形で押韻しており、この結びつきを押韻手段のひとつとしてみる観点も重要である。

*sin(wesen)* + 現在分詞に当たる結びつきは Mhd. に始まったものではなく、インドヨーロッパ語の祖語からあったようで、古インド語のヴェーダ語とサンスクリット語、ギリシャ語にもみられる。ラテン語ではそれよりずっと稀であるが、ゲルマン諸語では程度の差はあるものの、最も広く用いられており、英語では今日の進行形として定着している<sup>6</sup>。

Ahd. においては『タツィアーン』*Tatian* で、分詞に格語尾がついている6例を含め *sin(wesan)* + 現在分詞は58例ある。ここで用いられたこの結びつきは *sin* に当たるラテン語 *esse* の何らかの形と現在分詞にそのまま当てられたもの以外に、*esse* + 形容詞に、あるいは稀に定形動詞に、さらに *esse* + 未来分詞、また *esse* + 形式所相動詞 [= 受動態の形をもちながら能動の意味をもつ動詞] の完了分詞に相当する。次にいくつかの例を挙げてみよう。

(4) Her thô uwas in themo skefe ubar houbitphuliuui slâfenti.  
主はその時船の中で枕をして眠っておられた。 (Tat. 52, 3)

(5) thiz ist ther fon demo ih iu quad,  
thie dâr after mir quementi ist... (Tat. 13, 8)

これが(私より前におられた)方が私より後に来られると  
私が話したお方だ。

(6) *Uuanta ih fon mir selbemo ni bin sprehenti*, (Tat. 143, 6)

なぜなら私は自分から進んで話しているのではなく…

(4)の例は他の多くの個所と同様、ラテン語そのままの訳で行為の継続を表わしている。この個所に相当する Nhd. 訳の聖書では *Und er war hinten auf dem Schiff und schlieff auf dem Kissen* (Marc. 4, 38) と二つの述部に分けられている。(5)の例は *ist* に当たるラテン語の *est* と「来る」という意味の *venio* の未来分詞 *venturus* に当てたものであり、Nhd. 訳では *Dieser war es, von dem ich gesagt habe : Nach mir wird kommen, der vor mir gewesen ist* (Joh. 1, 15) と未来で表わされている。(6)の例は *bin* に当たる *sum* と「話す」という意味の形式所相動詞 *loquor* の完了分詞 *locutus* の組合せを *bin sprehenti* と訳しているが、Nhd. 訳では *Denn ich habe nicht von mir selber geredet* (Joh. 12, 49) と現在完了になっている。

『タツィアーン』はラテン語からの翻訳文学であり、それも、複数の訳者による散文訳である。ラテン語をいかにドイツ語で再現するかが問題であった。なかにはラテン語をほとんどそのままドイツ語に移しかえる者もあったが、多くの訳者たちはそれまでになかったキリスト教の内容をいかにドイツ語で表わすか、ラテン語の影響を受けながらも苦勞し、工夫した。この翻訳は押韻とは無縁であった。これに対して、『総合福音書』の場合は聖書の記述をそのまま翻訳するのではなく、オトフリトが福音書の内容を編集しなおし、自分たちの言葉 [=ドイツ語] で表わすことが眼目で、それも初めて脚韻を用いる試みであった。この作品においては *sin(wesan)* + 現在分詞の結びつきが『タツィアーン』よりもずっと多くみられる。

ケレ (Johann Kelle) によれば「ある行為が継続していることを強調しようとするとき、その行為が現在か過去かに応じて *sin* の現在あるいは過去と現在分詞による書き替えが用いられる。オトフリトがとくに第1巻でしばしば用いたこの表現法は、この副次的概念がない場合にも非常に多くみられる」<sup>7</sup>。まず、継続している状態を示すとみなされる例を挙げると、

(7) sia ist engilo menigi in himile êrenti. (O. I. 3, 32)

多くの天使たちが天国で彼女を敬っている。

(8) sô wârun se unzan elti thaz lib leitendi. (O. I. 4, 10)

こうして彼らは高齢になるまで命を永らえていた。

しかし次の例は継続の意味はなく、単独の動詞と同じ内容を表わすとみられる。

(9) Wârun frâgênti, wâr er giboran wurti,

joh bâtun io zi nôti, man in iz zeigôti. (O. I. 17, 13f.)

(彼らは) 彼がどこで生まれたのか尋ねた。

そしてそれを教えてくれるようにしつこく頼んだ。

1行目の Wârun frâgênti は2行目の bâtun と同様、過去の frâgêtun と等価であるが、werdan の接続法過去 wurti と韻を踏むためにこのように書き替えられていると考えられる。ちなみに frâgên は作品全体で38回用いられているが、そのうち上の個所以外に次の2個所がこの迂言表現で、とくに継続の意味がなく、現在分詞によって押韻している。これに対し、動詞単独の他の35個所では押韻に用いられているのは zi frâgenne (III. 20, 124) を含めて6個所だけである。

(10) sie was er frâgênti, wâr Krist giboran wurti. (O. I. 17, 34)

(11) Sprâchun thô thie liuti joh wârun frâgênti, (O. II. 11, 31)

さらにまた、未来に生じる事柄も表わして、

(12) Er ist thir herzblidi, ouh wirdit filu mâri ;

ist sînêru giburti sih worolt mententi. (O. I. 4, 31f.)

彼はあなたの心を喜ばせ、また皆によく知られるようになるでしょうし、世のひとつとは彼の誕生を喜ぶでしょう。

上に挙げた例ではすべて現在分詞が前行または後行の最後に置かれて押韻に用いられている。この作品で *sin(wesan)* + 現在分詞の結びつきは全部で90回出てくるが、そのうち押韻に関係していないのはわずか3箇所のみである。また、分詞が格語尾をつけているのが11箇所あり、これらもすべて次の例のように押韻のためとみられる。

(13) *joh thie mit imo in nôte wârun wallônte.* (O. IV. 9, 26)

そして彼とともに迫害のなかをさすらっていた人々

*sin(wesan)* + 現在分詞はたしかに継続を表わす場合もあるが、しかし、オトフリトにあつてはこの迂言表現は上でみたように、脚韻を踏むためのひとつの重要な手段として用いられていると言うことができる。そのことは、彼が作品を書き始めて韻を踏むのに苦労したと思われる最初の巻において特に多くこの結びつきがみられ、押韻技巧に長けてくるにつれて第2巻以降では激減していることから明らかである<sup>8</sup>。

さて、中高ドイツ語に戻って、改めて押韻の手段としてのこの結びつきを見直してみよう。ここでもこの迂言形は頻繁に見受けられる。

(14) *und hern Gâweins swester und ir kint,*

*diu mir ze herzen gēnde sint/...* (Iw. 4905f.)

そしてガーヴァイン殿の姉上と

私の心を打つ姉上の子供たち／…

(15) *daz si mit vlize enpfâhe die triutinne mîn.*

*daz wil ich immer diende umbe Kriemhilde sîn.*

(NL 540, 3f.)

私の大切な人を心をこめて迎えてくれるよう (伝えて下され)。

クリエムヒルトにはずっとその恩に報いるつもりだ。

(16) *wie diu mâze machen sol*

*die untugende zaller vrist*

*ze tugenden, swerz wol mezzend ist.* (W. Gast 10176-78)

事を正しく比較考量するならば、

いかに節度がつねに不徳を徳に  
変えるかを、(あなた方は今しかとお聞きになりました)

上の三つの例とも特に継続の意味はなく、この組合せによって *sin* の現在形あるいは不定形で押韻している。これらはふつうは、それぞれ次のように動詞単独で表わされる。

(14') mir gêt ze herzen ir clage  
näher danne ich iemen sage. (Iw. 1433f.)  
彼らの悲しみようは  
口で言い表わせないほど私の心を打つ。

(15') dô sprach der künec Gunther :  
«daz dien ich immer um dich.» (NL 160, 4)  
「永久にそなたのその恩に報いよう」とグンテル王は言った。

(16') swer mit der mâze kan mezzen wol  
der tuot ez allez als er sol. (W. Gast 9939f.)  
節度をもって正しく比較考量できる者は  
すべてをなすべくように行なう。

また、*jehen* の現在分詞 *jehende* が *sin* の何らかの形と結びついた迂言表現が『トリスタン』*Tristan* に次のように3度出てくるが、3度ともどちらかで押韻している。

(17) und daz sî nâch der selben zit  
der werlde jehende wære,  
daz sî daz kint gebære ; (Trist. 4248-50)  
そしてその期間が過ぎたあと  
自分がその子を生んだと  
世間の人に言うように、(妻に命じたこと)

この個所は、忠義者ルーアルが、さらわれて行方不明になったトリスタ

ンを探しに旅に出て3年目に、ようやくマルケ王の宮廷に尋ね当て、トリスタン誕生の時のいきさつを、つまり、生まれたばかりの主君の子供の命を救うため、自分の子と偽って妻にお産の真似をさせたことを、王の前で説明するくだりの一部である。ここはルーアルが妻に命じた内容を表わす間接話法で、特に継続の意味はなく、本来なら *jehen* の接続法過去 *jæhe* でいいところが、次行の *gebære* と韻を踏むために *jehende wære* となっている。この話をルーアルが実際に妻に命じたところでも、

(18) und daz si nâch der selben zit  
jæhe unde jehende wære,  
daz si daz kint gebære,  
daz ir junchërre solte sîn. (Trist. 1900-3)  
そしてその期間が過ぎたあと  
本当は若き主君であるその子を  
くれぐれも自分が生んだと  
言うように、(妻に厳しく命じた)

ここは「くれぐれも言うように」という強調の意味もあるだろうが、行を満たし、押韻する必要からもこのような表現になっていると考えられる。次の例も明らかに押韻のための書き替えであろう。

(19) wiltû mir noch gevolgic wesen  
und mir des zinses jehende sîn,  
mîn swester diu künigin  
diu muoz dich selbe heilen/... (Trist. 6954-57)  
おまえがまだ今のうちに  
私の言うことに従って私に貢ぎを認めるなら、  
妹の王妃自身に  
お前の治療をさせよう／…

これに対し、次の個所では迂言形を用いる必要がなく *jehen* の接続法

過去 *jæhe* が行末に置かれて押韻している。

- (20) *durch niht, wan daz man jæhe,*  
*daz man ouch in dâ sæhe, (Trist. 8957f.)*  
ただただそこで彼の姿も見かけたと  
言ってもらうためだけに、

グリム (Jacob Grimm) によれば、*er ist essend* は「食べ続けている」  
のであり、*er war essend* はただ一口食べただけではなく、「食べ続けて  
いた」のである。この表現は時制の区別と重なるところがあり、*er ißt* は  
本来食べ続けているかぎりにおいて用いられ、食べる行為が終わると、  
*er aß* ではなく、*er hat gegessen* である<sup>9</sup>。また、「Mhd.の詩人たちに  
はこれ [=この迂言形] は語りに変化をつけるため、詩行を適宜拡大す  
るため、そして表現により細やかな彩りをつけるのに役立っている。し  
かし、すべての詩人がこれを好んで利用しているわけではなく、ある者  
は稀にしか、あるいはまったく用いない」<sup>10</sup>と云う。しかしながら、Ahd.,  
Mhd.ではまだ時制の体系が確立してはおらず、グリムが上に述べたこ  
とは厳密には Nhd.にしか当てはまらないし、Mhd.の古典的作品にはこ  
の用法はよくみられる。Mhd.の詩人たちにとってはいかに押韻するか  
が重要な関心事であった<sup>11</sup>。

### 3. *werden* と現在分詞

この結びつきは Ahd.では *sîn* と現在分詞ほど多くなく、『ツィアーン  
ン』、オトフリトとも2度ずつしか出てこない。

- (21) *Inti nû uuirdist thu suigenti inti ni maht*  
*sprehhan unzan then tag, (Tat. 2, 9)*  
そして今あなたはおしになり、その日までものが言えなくなる  
(22) *Thie mîn furlougnit fora mannun inti mîn scamenti uuirdit*  
*in thesemo furleganen cunne inti suntigemo, (Tat. 44, 21)*  
人の前で私を拒み、この罪深い姦淫の世代にあって

私を恥じる者

(23) Thô ward mund sinêr sâr sprechantêr, (O. I. 9, 29)

その時すぐに彼の口はしゃべるようになった

(24) Wio mo sô gizâmi gisiuni sin biquâmi,

joh sehenti avur wurti ther blint was fon giburti.

(O.III. 20, 121f.)

生れつき目が見えなかった者にどのようにしてかくも見事に  
視力が与えられ、ふたたび目が見えるようになったのか。

(21)の例では sin に当たるラテン語の esse の未来形と現在分詞を、(22)では esse の未来完了形と分詞形容詞を werdan+現在分詞で表わしており、いずれも未来に関わる内容である。これに対し、オトフリトではいずれも過去の事柄を表わす。(23)の例では分詞が主語と同じ男性1格の語尾を付け sinêr と押韻し、(24)の例では分詞ではなく werdan の接続法過去 wurti が giburti と韻を踏んでいる。これらの Ahd. の例では分詞(scamenti)が動詞として目的語(min)をとっている(22)の例以外は werdan に本来の意味があり、現在分詞は形容詞的性格が強く、いわゆる迂言表現とは言えないかも知れない。それでは Mhd. ではこの結びつきはどうであろうか。

(25) unz sî mich brâhte ûf die vart

daz ich ir nâch jehende wart. (Iw. 2985f.)

ついに彼女は私をして彼女の意見に

従わしめることに成功した。

(26) dô si sî vrâgende wart

ob si iht weste sine vart, (Iw. 5891f.)

彼女がその女性に彼がどこへ行ったか

知っているかどうか尋ねたとき、

(27) und also er in vrâgende wart,

diu ritterschaft losete elliu dar

und nam Rûâles mære war. (Trist. 4118-20)

そして王が彼に尋ねたとき、  
騎士たちはみな耳を傾け、  
ルーアルの話を注意深く聞いた。

(25)の例の *einem nâch jehen* は *jm. beistimmen, folgen* の意味であるが、ここでは前行の *vart* と押韻するために動詞単独の *jach* の代わりに *jehende wart* となっているとみることができる。(26)の *vrâgende wart* も同様であろう。(27)の *vrâgende wart* をベヒシュタイン (R. Bechstein) は *vrâgete* と同じ意味だとしているが、ガンツ (P. Ganz) は起動相ととっている<sup>12</sup>。

グリムによれば、このような書き替えによって起動相的な曲面が表わされ、行為の開始あるいは出来事の始まりが特に強調されることがある。つまり、*„er ist weinende“*が、*„er zerfließt in Tränen“*とすれば、*„er wirt weinende“*は *„er bricht in Tränen aus“* であろうが、どちらも動詞 *weinen* の単独の意味でも用いられ、*„er weint“* 以上のものを含まないこともある<sup>13</sup>。

シュレーブラーによれば、この結びつきは先ず過去に起こった出来事の起動相的性格を表わすものであったが、それが、始まった出来事の継続を意味する場合にも用いられるようになり、さらに、*werden* の現在形が現在分詞と結びつくと「*werden* の現在形は過去と未来との間の広がりがない点としての純粹の現在を表わすことができないので、現在分詞とそれの結びつきは始動相的な意味から未来の出来事を表わす時間的な意味へと移行する」<sup>14</sup>として次のような例を挙げている。

- (28) *si getuot uns noch vil leide, swie siz getraget an.*  
*jâ wirt ir dienende vil manic wætlicher man.* (NL 1210, 3f.)  
彼女がどんな企みをするにせよ今に我々に  
多大の災いを与えるでしょう。  
きつと多くの立派な武士たちが彼女に  
仕えることになりましょう。

- (29) *er wirt mich gerne sehende*

und wirde ich ime verjehende  
 umbe sinen neven, der hie stât. (Trist. 3987-89)  
 もし私がここにいる王さまの甥について  
 話をすることにすれば、  
 王さまは喜んで私にお会い下さるだろう。

(28)の例は、もしクリエムヒルトがエッツェルと結婚すれば、先々多大の災禍をもたらすことになることになると心配するハゲネの言葉であり、2行目の wirt dienende は未来の事柄である。ちなみに1行目の getuot も動詞の現在形に前綴 ge-を付けて未来を表わしたものである。

werden と現在分詞による表現はドイツ語においては定着せず、後に現在分詞の代わりに不定詞が werden と結んで同じような意味を表わすようになる。それはまだ Ahd. には見当らず、Mhd. でもごく稀で、それも始めは過去形のみであった<sup>15</sup>。werden の現在と不定詞で未来を表わす例は Mhd. ではまだ非常に稀であったが、これは14世紀の後半から次第に広がり始め、werden+現在分詞に代わって未来時称を表わす迂言形として定着することになる。

#### 4. その他の動詞と現在分詞

(30) Sie fuaron quitolônti thio armalichun dâti,  
 jâmerlichôn thingon, io in then selben gangon ;  
 Sie giangun inan klagônti joh io fon imo sagênti,  
 (O. V. 9, 5-7)

彼らはこの不幸な出来事について語り合いながら  
 悲しげにその道を進んで行った。彼らは彼の死を  
 嘆き悲しみ、そして彼のことを話しながら歩いて行った

ここでは faran, gangan とともに三つの現在分詞が現われている。この例では faran, gangan とも動詞本来の意味をもち、その運動中の行為を現在分詞で表わしており、それらが押韻のために用いられている。Ahd. では弱変化動詞には3種類あり、それらの不定形どうしでは韻を踏むこ

とはできず、3行目のように現在分詞にすればそれが可能であった。

エールトマン(Oskar Erdmann)はオトフリトにおける動詞と形容詞の機能を併せもった分詞の用例を、

- 1) 主文の行為と区別される独自の活動を表わす場合
- 2) 述語動詞と融合してただひとつの活動の概念を表わす場合
- 3) 形容詞と同じように修飾する対象に内在する性質を表わす場合

に分類している。そして2)の場合、しばしば現在分詞は静止あるいは運動の動詞と融合してひとつの概念をなす。分詞はこのような静止あるいは運動の中で実行される活動を表わし、その場合、叙述の本質的な部分は分詞にあるとして、彼は *sin*, *werdan* 以外に *wahsen*, *stantan*, *sizzan*, *ligger*; *faran*, *gangan*, *queman*, *fliagan* を挙げている<sup>16</sup>。なかでも「運動の動詞の中で *faran* と *gangan* は非常にしばしば、そしてまったく型にはまったように現在分詞と結びつく」<sup>17</sup>。(30)の例はエールトマンのいう1)に当てはまるだろうが、2)に当てはまる例もいくつかみられる。

ケレも「非常にしばしば *gangu* の場合と同じように *faru* とともに用いられるこの分詞 [=現在分詞] は分詞の形をした動詞が表わす概念の書き替えに過ぎない」<sup>18</sup>と述べて、オトフリトの用例を分類している。その中から二つ例を挙げると、

(31) *joh wil es duan nu enti mit thiu ih fuar ferienti.*

(O. V. 25, 4)

そして私が語り進めてきた物語を今終えようと思う。

(32) *Sih fuarun thrangôn*ti* umbi inan thô thie liuti.*(O. IV. 30, 1)

その時人々は彼のまわりに群がった。

(31)の例文の *ferienti* は「船を進める」の意味の *ferren* の別形 *ferien* の現在分詞である。*ferienti faran* 「船を進めながら行く」が比喩的な意味で用いられたものであるが、(32)の例では *faran* の意味はまったく現われず、再帰動詞 *thrangôn* の完全な書き替えである。どちらの例でも分詞が押韻に用いられている。ちなみにオトフリトでは *faran* と現在分詞は18度あり、17度まで分詞で押韻している。*gangan* が現在分詞と用いられ

ているのは10度ある。そのうち分詞で押韻していないのは2度だが、それも1度は次のように *gangan* の接続法過去 *giangi* で韻を踏んでいる。しかもここでは主語が敬称の2人称 *ir* であるのに、押韻のため動詞が最初の述部の *ir* から次の述部では *du* に対応する形になっている。

- (33) *Ir gibuaztut mir in wâr thurst inti hungar,*  
*in hûs mih ouh intfiangi, theih wallônti ni giangi;*  
(V. 20, 73f.)

あなたはまことに私の渴きと飢えを癒してくださりさらに、  
私が彷徨わなくてよいように家に入れてくださいました。

*faran* と *gangan* 以外の動詞については現在分詞を伴う用例はきわめて少ないのでここでは取り上げない。いずれにしてもこのような結びつきでは、元来は動詞本来の意味があり、分詞は「～しながら」を表わしたのであろうが、それが押韻の手段として部分的に動詞の迂言表現にもなったのだと考えられる。『タツィアーン』では *faran*, *gangan* とともに現在分詞を伴うこのような用例は見当たらない。

では、Mhd. では事情はどうであろうか。筆者の見るところどちらも現在分詞を伴う例は少なく、その場合もほとんど分詞は「～しながら」の意味だが、*gân* に迂言表現ととることができる場合がある。例えば、

- (34) *Der künic mit sinen vriunden rûnende gie.*  
*Hagen von Tronege in nie geruowen lie. (NL 882, 1f.)*  
王は親しい者たちと相談をした。  
トロネゲのハゲネは王に落ち着いて考えさせなかった。

ここは、ハゲネの策略でザクセン、デンマルクが再び宣戦布告してきたと偽りの使者を仕立て、それを受けてグンテル王が重臣たちとジーフリト暗殺のための相談をしている場面である。この *gie* は「歩く」という行為を表わすよりはほとんどコプラに近く、ただ押韻のために用いらただけで、半述語的な現在分詞 *rûnende* が実質的な述語となっている<sup>19</sup>。ま

た、きわめて稀だが *tuon* にも現在分詞を伴ったこのような用法がある。この場合は押韻の必要はないが、行のリズムを整えるためにこの迂言形を用いたのであろう。

- (35) *wan man sol tuon nimêr*  
*rihtende dan diu schulde ger.* (W. Gast 10047f.)  
なぜなら罪が求める以上には裁きを  
行なうべきではないから。

文法書には「半述語的な規定語は動詞がコプラに等しいとき、真の述語に非常に近くなることがある」<sup>20</sup>としていくつかの例の中に *gân* が形容詞、さらには名詞までもとった次のような文例も挙げられている。

- (36) *ouch gienc der walt wildes vol:* (Iw. 3272)  
森はまた野獣でいっぱいであった。  
(37) *aller wibe wünne diu gât noch magedin.* (MF 10, 8)  
すべての女性の中で最もすばらしいのは  
今でも処女である。

(37)の例に文法書には *die herrlichste aller Frauen ist noch Jungfrau* という部分訳が添えられている。*gân* のこのような用法は、また不定詞を伴って、

- (38) *zuo der gienc er sitzen*  
*und gnâdet ir vil sêre,* (Iw. 2722f.)  
彼はその乙女の横に腰を下ろし、  
おおいに感謝の言葉を述べ、  
(39) *Die boten er dô gruozte und hiez si sitzen gân.* (NL 879, 1)  
王は使者たちを迎え、席につくよう促した。

*gân* や *komen* のような運動を表わす動詞と用いられる不定詞は、本

来は目的を表わし、「～するために行く（来る）」という意味であるが、ここでは動詞そのものの意味が薄れ、不定詞が実質的な述語となっている。Nhd.ではこれは *spazierengehen* のような分離動詞にその名残を留めており、目的を表わすにはふつう *zu*+不定詞が用いられる。前置詞を伴わないのは *einkaufen gehen* とか *angeln gehen* などごく限られたものしか残っていないが、Mhd.では動詞が *ze* を伴わない不定詞とともに用いられる例が頻繁にみられる。上でみた現在分詞を伴った動詞の迂言表現はほとんどが押韻のためであったが、次稿では同じ観点で不定詞を伴った動詞の迂言表現を中心に調べてみたい。

#### 引用原典および主要参考文献

- Tatian*. Herausgegeben von Eduard Sievers, 2. neubearbeitete Ausgabe ; Unveränderter Neudruck, 1966 Paderborn (=Tat. 114, 2 usw.).
- Otfrids Evangelienbuch*. Herausgegeben von Oskar Erdmann, 6. Aufl., besorgt von Ludwig Wolff (Altdeutsche Textbibliothek 49), Tübingen 1973 (=O.V. 6, 41 usw.).
- Hartmann von Aue : *Erec*. Herausgegeben von Albert Leitzmann, 5. Auflage, besorgt von Ludwig Wolff (Altdeutsche Textbibliothek 39), Tübingen 1972 (=Er.).
- Derselbe : *Iwein*. Herausgegeben von G. F. Benecke und Karl Lachmann, 6. Ausgabe ; Unveränderter Nachdruck der 5., von Ludwig Wolff durchgesehenen Ausgabe, Berlin 1966 (=Iw.).
- Das Nibelungenlied*. Nach der Ausgabe von Karl Bartsch herausgegeben von Helmut de Boor, 20. revidierte Auflage, Wiesbaden 1972 (=NL).
- Wolfram von Eschenbach : *Parzival*. Herausgegeben von Albert Leitzmann, 7. Auflage, revidiert von Wilhelm Deinert (Altdeutsche Textbibliothek 12, 13, 14), Tübingen 1961-65 (=Parz.).
- Gottfried von Strassburg : *Tristan*. Nach dem Text von Friedrich Ranke neu herausgegeben, ins Neuhochdeutsche übersetzt, mit einem Stellenkommentar und einem Nachwort von Rüdiger Krohn, 2., durchgesehene Auflage, Stuttgart 1981 (=Trist.).
- Der Wälsche Gast des Thomasin von Zirclaria*. Herausgegeben v. H. Rückert,

- mit einer Einleitung u. Register v. F. Neumann, Berlin 1965 (= W. Gast).
- Jacob Grimm : *Deutsche Grammatik*. Bd.IV. Herausgegeben von Gustav Roethe und Eduard Schröder ; Reprografischer Nachdruck der Ausgabe Gütersloh 1898, Hildesheim 1967.
- Jacob und Wilhelm Grimm : *Deutsches Wörterbuch* ; Nachdruck der Erstausgabe 1854-1971, München 1984.
- G. F. Benecke, W. Müller, F. Zarncke : *Mittelhochdeutsches Wörterbuch*, I -III ; Reprografischer Nachdruck der Ausgabe Leipzig 1854-66, Hildesheim 1963 (=BMZ).
- Oskar Erdmann : *Untersuchungen über die Syntax der Sprache Otrfrids*. Halle 1874-76 ; Nachdruck, Hildesheim/New York 1974.
- Hermann Paul : *Mittelhochdeutsche Grammatik*, 19. Auflage, bearbeitet von W. Mitzka, 2. Druck, Tübingen 1966 (= Paul/Mitzka).
- Derselbe : *Mittelhochdeutsche Grammatik*, 20. Auflage von Hugo Moser und Ingeborg Schröbler. Tübingen 1969 (=Schröbler).
- Paul Piper (Hrsg.) : *Otrfrids Evangelienbuch. Mit Einleitung, erklärenden Anmerkungen, ausführlichem Glossar und einem Abriss der Grammatik*, II. Theil : Glossar und Abriss der Grammatik, Freiburg i. B. 1887.
- Johann Kelle (Hrsg.) : *Otrfrids von Weissenburg Evangelienbuch. Text Einleitung Grammatik Metrik Glossar* , III; Nachdruck der Ausgabe 1881, Aalen 1963.
- Karl Bartsch (Hrsg.) : *Der Nibelunge Nôt. Mit den Abweichungen von der Nibelunge Liet, den Lesarten sämtlicher Handschriften und einem Wörterbuch*, II. 2 Wörterbuch ; Reprografischer Nachdruck der Ausgabe Leipzig 1880, Hildesheim 1966.
- R. A. Boggs : *Hartmann von Aue Lemmatisierte Konkordanz zum Gesamtwerk*. Nendeln 1979. (Indices zur deutschen Literatur 12/13).
- C. D. Hall : *A complete Concordance to Wolfram von Eschenbach's Parzival*. New York & London 1990.
- F. H. Bäuml/E.-M. Fallone : *A Concordance to the NIBELUNGENLIED* (Bartsch-De Boor Text). Leeds 1976.
- M. E. Valk : *Word-Index to Gottfried's Tristan*. Madison 1958.

## 注

- 1) 川島敦夫他編 『ドイツ言語学辞典』 東京 1994年 691ページ。
- 2) 同上書同ページ
- 3) Paul/Mitzka, § 287. 文法書からの引用については、上に挙げた引用原典に当たり押韻を示すため改行したり行を追加した。また、綴りが異なる場合は引用原典に従って変えてある。以下同様。
- 4) Schröbler, § 307.
- 5) Vgl. *Wolfram's von Eschenbach Parzival und Titarel*. Hrsg. v. K. Bartsch. Leipzig 1875 (Deutsche Classiker des Mittelalters 9), S. 166 ; *Wolframs von Eschenbach Parzival und Titarel*. Hrsg. v. E. Martin. Zweiter Teil. Halle a. S. 1903. Anm. zu 154, 30).
- 6) Vgl. Grimm, *Wörterbuch* Bd. 16, Sp. 313
- 7) Kelle, S. 707. なお、本稿に挙げたオトフリトからの例文は O. Erdmann 編の版から引用しているが、そこでは長音符号が付されていないので、行のリズム、流れを伝えられるように、P. Piper の版に従って長音符号を付け加えた。また、同様に『タツィアーン』からの例文も E. Sievers 編のテキストには長音符号がないので、同編者による Glossar に従ってそれを付したことをお断わりしておく。
- 8) Vgl. Erdmann, *Untersuchungen* 1. Teil § 357. エールトマンは第 2 巻以降ではこの表現法がほとんど完全に棄てられたとしているが、筆者の計算では、この結びつきは第 1 巻では押韻していない 2 例 (I. 1, 112. 15, 2) を含めて、69 個所、第 2 巻で 3 個所、第 3 巻で 6 個所、第 4 巻で 4 個所、第 5 巻で 6 個所、ルートヴィヒ・ドイツ王とザンクト・ガレンの僧ハルトムートへの献辞の中にそれぞれ 1 個所となっている。
- 9) Vgl. Grimm, *Grammatik* S. 5.
- 10) Ibid. S. 6.
- 11) もちろん一口に Mhd. と言っても、詩人により、作品により用いられている単語、押韻用語にはそれぞれ特徴がある。例えば、jehen と stân (stên) のいくつかの形を次に一覧表にして示すと (前綴 ge- の付いたものもこの中に含めている。また、かっこ内の数字は押韻個所の数で内数)、  
わずかに 2 つの動詞について 6 つの作品での比較であるし、それぞれの作品の行数も異なるので一般化はできないが、これらの中で『パルツィヴァール』と『トリスタン』に比較的多様な押韻技法がみられると言える。  
なお stân は『パルツィヴァール』では現在語幹ですべて stên 形が用いられ

	jehen	giht	jach	jâhen	j エ he	jehende
NL	36(33)	4(3)	9(5)	7(0)	1(0)	0
Parz.	65(52)	51(39)	62(46)	13(6)	8(5)	0
Er.	30(30)	1(0)	9(3)	7(0)	0	0
Gregor.	5(4)	0	5(5)	4(3)	0	0
Iw.	8(8)	9(3)	11(8)	3(3)	0	1(0)
Tristan	17(14)	24(21)	9(3)	8(4)	3(2)	3(1)
	stân	stât	stuont	stê	stuonden	stânde
NL	98(98)	33(31)	42(8)	0	18(0)	0
Parz.	44(39)	73(33)	117(21)	7(7)	34(6)	6(0)
Er.	32(31)	34(25)	38(1)	2(2)	8(0)	2(0)
Gregor.	7(6)	14(11)	11(0)	2(1)	1(0)	1(0)
Iw.	20(17)	28(17)	24(1)	10(7)	1(0)	2(0)
Trist.	42(35)	55(27)	52(6)	19(17)	12(0)	2(1)

て、ほとんど gên と押韻している。しかし、ここでは紙幅の関係で stân の項にまとめて挙げた。その他の作品では接続法現在形以外はほとんどすべて stân 形で、gân 以外に getân, hân, wân 等さまざまな押韻相手をもっている。『パルツィヴァール』以外に例外的に stên 形が用いられているのは、『ニーベルンゲンの歌』で1個所(gestên 987, 1)『エーレク』で1個所(stên 1139), 『イーヴァイン』で1個所(stên 4184), 『トリスタン』で2個所(stênde 2649, 12988)ある。そのうち押韻に関係していないのは Er. 1139 と Trist. 2649 だけであるが、ここがなぜ stên 形なのか筆者には理解できない。いくつかのテキストを調べてみたが、どれも stên 形である。おそらく写本がそうなのであろう。

- 12) Vgl. *Gottfried's von Strassburg Tristan*. Hrsg. v. Reinhold Bechstein. Erster Teil. Leipzig 1930 (Deutsche Klassiker des MAs 7). Anm. zu 4116. これを改訂した P. Ganz は werden+現在分詞で起動相を表わすとして, als der König ihn zu fragen begann と注釈している。
- 13) Vgl. Grimm, *Grammatik* S. 6f.
- 14) Schröbler, § 299.
- 15) Vgl. Grimm, *Grammatik* S. 7 ; Schröbler, § 307, Anm. 3.
- 16) Vgl. Erdmann, *Untersuchungen* 1. Teil § 354 ; § 356.
- 17) Ibid. § 359.

- 18) Kelle, S. 115.
- 19) ハットー(A.T. Hatto)は Gunther went conversing with his friends in whispers と文字どおり訳しているが、ブラッケルト(H. Brackert)は Heimlich beriet sich der König mit seinen Vertrauten, ゲンツマー(F. Genzmer) は Der König mit seinen Freunden, zum Rate gingen sie と訳している。
- 20) Paul/Mitzka, § 204. gehen のこのような用法は例えば müßig gehen, schwanger gehen など Nhd. にも残っている。

## Umschreibungsausdrücke im mittelalterlichen Deutsch — unter besonderer Berücksichtigung des Endreims — (I)

Osamu TAKEICHI

In literarischen Werken des deutschen Mittelalters findet man verschiedene Typen der Umschreibungen. Hier wird die Verbindung von Verbum und Partizip Präsens behandelt, unter besonderer Berücksichtigung des Endreims.

### 1. *sin(wesen)* + Part. Präs.

Die Fügung von *sin(wesen)* + Part. Präs. ist nicht nur typisch für das Mhd., sondern gehört schon der Ursprache an und ist jetzt im Englischen als sogenannte „progressive form“ grammatikalisiert. Im Nhd. ist dagegen diese Umschreibung bereits verschwunden und dieses Partizip kann sich mit dem Verb *sein* als Kopula nur dann verbinden, wenn es adjektiviert ist.

Im ahd. Tatian, einer Übersetzung aus dem Lateinischen, sind diese Verbindungen 58mal belegt. Sie entsprechen der Fügung von dem

„esse“ zu irgendeiner Form nicht nur mit dem Part. Präs., sondern auch mit dem Part. Futur, ferner mit dem Part. Perf.

Otfrid von Weissenburg benutzt diese Umschreibung sehr häufig. Diese Ausdrucksweise bezeichnet eigentlich ein Andauern, aber sie findet sich bei ihm nicht bloß in dem Fall, wo eine Handlung andauert, sondern „auch da, wo dieser Nebenbegriff fehlt.“ (J. Kelle)

- 1 ) *Wārun frāgēnti, wār er giboran wurti,  
joh bātun io zi nōti, man in iz zeigōti.* (O. I. 17, 13f.)

*Wārun frāgēnti* in der ersten Zeile bezeichnet keine anhaltende Handlung, sondern ist äquivalent mit *bātun* in der zweiten Zeile, aber es ist so umschrieben, damit es sich auf *wurti* reimt. Die Verbindung von *wesan* + *frāgēnti* findet man im Evangelienbuch dreimal, wo dann *frāgēnti* zum Reimen gebraucht ist, während *frāgēn* allein nur sechsmal von 38 Belegen zum Reimen dient. Die Fügung von *sīn(wesan)* + Part. Präs. überhaupt erscheint in diesem Werk insgesamt 90mal, hiervon nur dreimal ohne Reimbezug.

Auch im Mhd. kann die Umschreibung durch das Präs. oder Prät. des Verbs *sīn* mit dem Part. Präs. statt des einfachen Präs. oder Prät. eines Verbs angewendet werden, wenn die Handlung als eine dauernde gedacht wird. Aber wie I. Schröbler sagt, kann diese Umschreibung stehen, wenn das Verbum ein momentanes Geschehen bezeichnet.

- 2 ) *diu mir ze herzen gēnde sint/...* (Iw. 4906)  
3 ) *daz wil ich immer diende umbe Kriemhilde sīn.* (NL 540, 4)  
4 ) *wie diu māze machen sol  
die untugende zaller vrist  
ze tugenden, swerz wol mezzend ist.* (W. Gast 10176-78)

In diesen Beispielsätzen bezeichnet die Fügung von *sin* und Part. Präs. keine durative Handlung. Sie sind nur zum Reimen so umschrieben. Sonst werden sie jeweils mit einem bloßen Verb folgendermaßen ausgedrückt :

- 2') *mir gêt ze herzen ir clage  
nâher danne ich iemen sage.* (Iw. 1433f.)
- 3') *dô sprach der künec Gunther :  
«daz dien ich immer um dich.»* (NL 160, 4)
- 4') *swer mit der mâze kan mezzen wol  
der tuot ez allez als er sol.* (W. Gast 9939f.)

## 2. *werden* + Part. Präs.

Diese Verbindung ist im Ahd. nur wenig belegt : sowohl im Tatian wie im Evangelienbuch je zweimal. Im Mhd. erscheint sie öfters. Sie drückt im Präteritum aus „zunächst den inchoativen Charakter eines Geschehens, das sich in der Vergangenheit abgespielt hat.“ (I. Schröbler) Dann bedeutet sie auch die Fortdauer des begonnenen Geschehens.

„wenn *ist weinende* bedeutet : *er zerfließt in thränen*, so liegt in *wirt weinende* : *er bricht in thränen aus* ; beide formeln können aber auch nichts enthalten sollen als den begrif : *er weint*“, so sagt J. Grimm und wirft dem albrechtischen Titulrel den Mißbrauch der beiden Verbindungen für den Reim vor. Aber wir finden bei den anderen mhd. Dichtern manchmal diesen Gebrauch zum Reimen ohne besondere Nuance, wie zum Beispiel :

- 5) *unz sê mich brâhte ûf die vart  
daz ich ir nâch jehende wart.* (Iw. 2985f.)
- 6) *und also er in vrâgende wart,  
diu ritterschaft losete elliu dar*

*und nam Rûâles mære war.* (Trist. 4118-20)

Diese Verbindung nähert sich dann im Präsens der futurischen Bedeutung.

7) *er wirt mich gerne sehende  
und wirde ich ime verjehende  
umbe sînen neven, der hie stât.* (Trist. 3987-89)

Die Fügung von *werden*+Part. Präs. hat sich jedoch im Deutschen nicht eingebürgert, sondern der Verbindung von *werden*+Infinitiv Platz gemacht, und die letztere ist später für den futurischen Ausdruck grammatikalisiert worden.

Außer *sîn* und *werden* werden andere Verben der Ruhe oder Bewegung wie *gân*, *stân* usw. mit dem Part. Präs. kombiniert gebraucht. Dabei erhält aber das Partizip meistens seinen durativen Charakter. Nur bei *varn* und *gân* gibt es m. E. wenige Fälle, wo von der Umschreibung eines Verbs die Rede sein kann.

8) *Sih fuaron thrangônti umbi inan thô thie liuti,* (O. V. 25, 4)  
9) *Der künic mit sînen vriunden rûnende gie.* (NL 882, 1)

Wie oben gesehen, wird die Verbindung von Verbum und Part. Präs. im mittelalterlichen Deutsch sehr häufig gebraucht. Sie ist öfters ohne besondere Nuance eine bloße Umschreibung eines Verbums zum Reimen. Es ist in der mittelalterlichen gebundenen Dichtung sehr wichtig, wie man den Reim bildet. Dazu dienen verschiedene Mittel, und sicher spielt auch diese Umschreibung hierbei eine große Rolle.